

久遠本仏と諸仏との関係

村 野 宣 忠

分身諸仏は見宝塔品において初めて現われるが、それら分身諸仏は現に十方世界にあって説法しつつあるものとされている。分身とは釈尊が神通力によって化作した仏であり、釈尊と全く同形の仏であるが、釈尊と異なる点が一つある。それは、釈尊は分身に対して命令を発する地位にあり、分身は釈尊の命令を受ける地位にある、ということである。同時に存在する諸仏に於て命令をするものとされるものとの格差が生じたのは見宝塔品が初めてである。釈尊の命令は白毫の一光を放つという形をとって発せられ、この命令に従って分身諸仏は還って一処に集まるのであるが「還る」ことが命令によって行われた以上、「往く」ことも命令によって行われたと見るべく、分身諸仏は釈尊によって化作され、十方世界に派遣されたと見るべきであろう。この派遣の時期は見宝塔品以前法師品以後であり、その派遣の叙述は省略されたと見るべきであろう。

見宝塔品以前の説相に従えば、十方世界には分身諸仏が

派遣される以前に既に現在諸仏が居られる。分身諸仏の派遣によって十方世界の諸仏は増員されたのか。分身諸仏と現在諸仏との関係如何。

これらの問題を解決するに当って、十方世界は有限であるか無限であるかを先ず考える必要がある。見宝塔品に「仏白毫の一光を放ちたもうに、東方五百万億那由佉恒河沙等の国土を見たてまつる」とあるが、これは「東方にある無限の世界のうち見えたのは五百万億那由佉恒河沙等の国土だけであって、その先にある国土は見えなかった」という意味ではなく、「東方には五百万億那由佉恒河沙等の国土があり、それが全部見えた」という意味であろう。数の表現は如何に大きくとも、十方世界の国土の数は有限であると見るべきであろう。一国土には一仏しか存在しない。唯我一人能為救護の句の成立する所以である。十方世界の各国土には既に現在諸仏の一仏が居られる。余仏の入る余裕はない筈である。しかるに實際において分身諸仏は十方世界に到って説法された。これは如何にして可能であったか。

化作は創造ではない。法師品の「化の四衆」は仏が創造した四衆という意味ではなく、現実存在する四衆が仏に化作されたという自覚を持った場合の呼称と見るべきであ

ろう。これと同様に、分身諸仏とは現在諸仏が「私達は釈尊の分身である」と宣言した場合の呼称と見るべきであろう。分身諸仏は現在諸仏と別個の存在ではなく、現在諸仏と全同である。釈尊が分身を化作したということは、釈尊が「私は現在諸仏の本仏である」と宣言したことを意味するものであり、これは又同時に、現在諸仏が「私達は釈尊の分身である」と宣言したことを意味するものでもある。本仏という概念は空間的に現在諸仏を統一したものであるとして既に見宝塔品に現われていると見るべきであろう。

多宝如来はその誓願にも不拘法華経を説かれた日月灯明仏や大通智勝仏を讃歎されなかった。その理由はこれらの諸仏はその出世当時の現在諸仏の本仏であることを宣言されなかったからであると見るべきであろう。釈尊が現在諸仏の本仏たることを宣言された時多宝如来は初めて出現して釈尊を讃歎された。讃歎はその仏の所説が真実であることを認めた時初めて可能である、真実であるか否か不明のまま讃歎するものはいない。「証明を作して讃めて善哉といわん」という場合の証明は讃歎の一部を存するものである。事務的に発行される証明書に使用される証明には讃歎の意味は伴わない。讃歎という語があれば証明という語がなくとも証明が含まれている。

多宝如来は「この経を聴かんがための故に」「法華経を説くを聞かんがための故に」「来至せり」とあり、「証明のために」とはない。多宝如来の証明は法華経の真実性に不可欠のものではない。釈尊が十方現在の諸仏の本仏であるという真理は多宝如来の証明がなくとも微動だもしない。ただし一般大衆にとっては、多宝如来という過去仏が現在仏である釈尊を讃歎したことは釈尊の本仏としての資格に客観性が与えられたものと受取られたであろう。この限りにおいて多宝如来の出現は効果があったといえよう。しかしこの効果はそれ以上には出なかった。釈尊の次の課題は過去仏を統一することにあった。そのためには多宝如来の存在はむしろ障害ですらあった。寿命品において多宝如来の存在が完全に無視されているのはこのためである。一尊四土説はこの寿命品の説相に論拠を求めようとするものであり、一塔兩尊四土説は寿命品の前後の諸品の説相に論拠を求めようとするものである。

(以下略)